

「道義撐持、東西互照—隱元禪師と黄檗文化」

林觀潮

目次

| | |
|---------------------------|---|
| 一、「道義撐持、東西互照」—黄檗文化の魂..... | 2 |
| 二、日中友好、互学互鑑 | 3 |
| 三、普照国師、友好の象徴 | 4 |

一、「道義撐持、東西互照」-黄檗文化の魂

黄檗文化の魂は「道義撐持、東西互照」という隠元禪師の精神であり、「道義があつて、道義をもって、東と西に、人々は互いに支え、互いに護り照らす」という禪師の教えである。

2020年の初めに新型コロナウイルスの感染が発生して以来、日中両国は、民間から政府まで、お互いに支援をし、先人たちが開いた伝統的な友誼を高揚してきた。隠元禪師の提唱した「道義撐持、東西互照」（道義を持って互いに支え、東と西は互いに護る）という信念は、人々に改めて大きな勇気を与えている。

2月12日、日本黄檗文化促進会（千葉県柏市に本部）は、日本の民間団体、日本福建経済文化促進会、日中福清工商会、福清黄檗文化促進会（福建福清に本部）などと協同して、福建省に多量の医療物資を寄贈した。厦門航空の経由で運ばれたその箱の表面には、大字で隠元禪師の語録「東西互照、道義撐持」と書いた。

4月2日、福清黄檗文化促進会は、日本黄檗文化促進会、福清福山寺、東京アジア太平洋観光社などと協同して、京都黄檗山万福禪寺にマスク4万枚を送った。その箱の表面にも、大字で隠元禪師の語録「東西互照、道義撐持」と書いた。当日、大雄宝殿で感染終息の祈願法会を執り行った後、万福禪寺、京都府、京都市、宇治市に一万枚ずつを寄贈した。この件について、日本NHK、共同社、朝日新聞、読売新聞、京都新聞、また中国の新華社などは報道をした。

この頃、わたしたちは、隠元禪師の開いた偉大な事業が、日中両国文化の相互の交流と促進であり、また両国人民の相互の信任と支持することと改めて感じていた。

1661年8月29日、禪師は新しい京都黄檗山萬福禪寺に住持をした。この時に詠じた「初到檗山偶成」という詩は、「新しく黄檗を開いて禪基を壮とし、正脈は海外に流伝して奇となり。有志の英靈は須く著眼すべし、苦心して道義を共に撐持す」と詠えた。

この前の1659年5月、禪師は徳川幕府の要請に応じ、日本に在留して新寺を開くことを決めた。その後、福清黄檗山萬福禪寺の住持である、弟子の慧門如沛（1615-1664）に書信「復慧門首座」をしたため、「邇きに老僧、鉤旨を承領し、海外に新たに黄檗を開き、臨済正伝の一代典型を作る。其の功業は一時に未だ告成を得ず、帰りを云えば更に数載有る。公の茂年を知り、正に行道に堪えるべし。黄檗の法席を捨てれば、取る所に非ずや。須らく従上の忘軀為道の心を体すべし、当に老僧の邁年遠応の事を念じるべし、純鋼に身心を打就し、東西を互いに照らして尽くこと無し、自然に全功全美の事有る。吾の帰棹を待ち、以って大成を奏し、また吾が祖の願いを足す。そもそも衆徳の功を見、則ち靈山と黄檗は、儼然に一会なり。」と示した。

この後の1665年、禪師は福岡小倉広寿山福聚禪寺の住持である、弟子の即非如一（1616-1671）に書信「復廣壽即非座元」をしたため、「ここに聞く、虚白公が黄檗に継席し、断際の道を起すべくことを。また公らが此方に開化することを得、東と西は互いに照らし、法門は重々に光有り、また従上の法脈は連続して無間なるや。」と示した。

隠元禪師が楽しんで見守る美しい風景は、日本と中国を繋がる東海における安寧で平和な日々であり、両国の人民の間に共有される文脈の相通であり、文化の接続であり、文明の交流である。

このような美しい風景は、^{あたたか} 恰も禪師が晩年の詩篇に描かれた画のようである。その「松隠三吟」という詩篇に、禪師は、「妙は在る、天に生れてますます壮強なり、老来に海を跨って扶桑に到ることに。杖頭に新黄檗を挑出し、眉底に老大唐を返って観る。道義を終身に負くすべからず、師恩を永劫に忘れすべからず。聊かに一脈を通して東海に貫き、燥辣にして宗風は萬古に揚ぐ。」と歌った。

360年前、禪師が提唱していた「道義を持って互いに支え、東と西は互いに護る」という信念は、必ず現代の私たちに、改めて有益な啓発を与え、平和な未来へ邁進する勇気を与えて頂けると信じる。

二、日中友好、互学互鑑

2015年5月23日、中日友好交流大会が北京人民大会堂で行われ、日本からの友人三千人は大いに歓迎された。その際に習近平主席は参加し、講演の中に、隠元禪師を讃えながら、「中日は一衣帯水で、この二千年余り、平和と友好が両国人民の心の主旋律であり、両国人民は互いに学び合い、参考にして、それぞれの発展を促し、また人類文明の進歩のために重要な貢献をしました。私は福建省で仕事をしていた当時、中国の名僧、隠元大師が日本に渡った話を知りました。日本で隠元大師は仏教の教義だけでなく、先進的文化と科学技術も伝え、日本の江戸時代における経済社会の発展に重要な影響を与えました。2009年、私が日本を訪問した際、北九州などで両国人民の間に有する、途切れることのない文化的根源と歴史的つながりを直接に感じました」と言った。この講演は、隠元禪師と黄檗文化を重要視することを示し、日中両国に大きな反響を呼び起こした。

簡約的に言えば、黄檗文化とは、中国明時代の文化や思想を、隠元禪師と同時代の僧侶たち、また高い教養を持つ文化人たちが、明の優秀な人材を代表して日本社会に伝えて、江戸時代に熟成し、社会全般に影響を及ぼし、今も受け継がれている総合文化である。黄檗文化は日本社会の近代化や十九世紀の明治維新に基盤を作ったのではないかと考えられる。

黄檗文化の内核として、隠元禪師の弘めた黄檗宗は、禅風思想、戒律清規、法式儀軌、教団組織、寺院制度などの面から、当時の日本仏教に多大な影響を与え、各宗派の復興運動に大きな貢献をした。

仏教以外にも、黄檗文化は、明清の文化や文物をも伝え、思想、文学、語言、文字、また建築、彫塑、印刷、また音楽、医学、茶道、飲食、また絵画、書道、篆刻、また民衆教育、社会事業などの面から、江戸時代の社会生活の全般に影響を与えた。

今日に至り、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、日本近世の文化を語る際に、黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている。例えば、普段の日本人の生活に慣れる隠元豆や煎茶、また明朝体の字体、四百字詰め原稿用紙などは、黄檗文化の伝来ともよく知られる。

1992年、隠元禅師の生誕四百年に当って、禅学家柳田聖山（1922－2006）は、「近世日本仏教の改革-隠元」の文に、「近世日本的動きは、どの一面を取ってみても、黄檗文化の影響なしには解釈できない。」と説いた。また「隠元生誕四百年 霊性アジアの本質的な反省の時」の文に、「アジア文化思想の活力を取り戻す大局観より、「明治以後的急激な西欧化によって、とかく見逃されていた霊性アジアの、本質的な反省の時として、隠元生誕四百年を位置づけてよいのでないか。」と鋭く指摘をした。

2017年10月11日、長崎県と福建省との共催で、日中黄檗文化交流大会は福州に開かれた。この大会に、黄檗宗の近藤博道管長は、次のような挨拶をした。

「宗祖隠元禅師は、長崎の地を踏んでより360有余年が経過致しておりますが、その当時の日本仏教界に多大な影響を与えた業績はもとより、同時に明朝文化を伝え、両国の友好親善に貢献されました。私共は、この大会を契機にあらためて業績を顕彰し広く国内外にアピールすることが、宗祖への鴻恩に酬いるための使命であると考えております。初めての黄檗文化交流会に期待しております。

ご周知の通り、五年後の2022年に、私共の宗門において、「宗祖隠元禅師350年大遠諱事業」を計画しております。是非この事業にご支援、ご協力をいただければ幸いです。

日中交流は二千年以上の長い背景がございますが、今回の交流を契機に、真の道徳的交流を図り、これまでにない協力関係、友好関係を促進し、日中両国の恒久平和と繁栄のために少しでも寄与できますことを念願致します。」

三、普照国師、友好の象徴

日本では、隠元禅師の功績を讃え、普照国師とも敬称をされる。例えば、大正蔵第82冊に収められる隠元語録は『普照国師語録』と題される。

隠元示寂の前日、1673年（日本寛文13年）4月2日、後水尾法皇より大光普照国師という封号が贈られた。その後、皇室は50年ごとの遠忌に、隠元禅師に諡号を賜い、慣例となった。1722年、霊元上皇より仏慈広鑑国師、1772年、后櫻町上皇より径山首出国師、1822年、光格上皇よ

り覚性円明国師、1917年、大正天皇より真空大師という封号を贈りました。最近の封号として、1972年、昭和天皇は華光大師を贈りました。その間、1882年（日本明治15年）、明治天皇は京都黄檗山萬福禅寺に「真空」という寺額を賜った。

歴代の皇室宸翰は、京都黄檗山万福禅寺に現存されている。その中、1673年の後水尾法皇の宸翰は、次のような内容である。

「敕。朕は聞く、臨済の道が天下に徧行し、天童雙徑に至り、光輝がますます盛んなることを。唯し我が日域は久しく宗匠を乏き、幸いに黄檗の隠元琦和尚は請を受けて東来し、綱宗を重立し、済道を闡揚し、大いに国に光り、功は磨（みが）くすべからず。朕はしばしば法乳に沾し、簡らんで朕の心に在る。故に大光普照国師の号を特賜し、以って厥の徳を旌す。欽なるや。故に諭す。」

1722年（日本享保7年）3月13日の霊元上皇の宸翰は、次のような内容である。

「敕。朕は以う、支那の宗匠、断際の後身、徳の神物を感じしめ、法の王臣に囑すことを、黄檗開山大光普照国師の隠元琦老和尚は乃ち其の人なるや。曾て請に応じて東渡し、300年来の已滅の宗灯を重めて掲起す。所以に先皇は帰崇し、寵栄は優渥なる。朕はまた深く夙縁有ることを慮り、其の聖旨に継ぎ、師の風に沐すことは、以って少しと為さずや。ここに半百忌辰の近臨に逢い、追慕して已むこと無し、更に徽號を加え、仏慈広鑑国師と諡す。塔は真空と曰く。以って将来を寿す。享保7年3月13日。」

このような連続的な封号贈りは、日本僧に対しても多く見えないことであり、東渡の唐僧に対して、ほかに例がないことであつた。日中の友好交流における隠元禅師の重みは、今後も、皇室からの封号追贈によって再認識されるだろう。

あと2年、2022年は、隠元禅師の350周年の遠忌を迎える。伝統によれば、日本皇室は隠元禅師に新しい封号を贈ると予見できる。封号贈りは、禅師の功績を認めることであると共に、禅師が象徴する日中友好交流事業を認めることでもある。人々の関心と期待が寄せられている。